

夢と失われた対象

—— 精神分析における「欠如」の問題を軸として ——

丸 山 明

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 人間は言語的世界に入ること、前言語的存在としての主体を失う。それは「かつてあった」ものではなく、言語的世界に入った後、「事後的にあったと仮定されうる」ものである。Freud は『夢解釈』において夢が幼児期の欲望成就の試みであり、夢分析が「無意識への王道」であることを見出したが、実は人間にとって最も古い幼児期体験は、そのものとしては「もうない」のであり、幼児期の欲望成就も常に失敗に終わる運命にある。

本論では、Freud が『草稿』(1895)において記述した事物 (Das Ding) とその存在判断の指標との関係を「欠如」として捉え、この「欠如」が心的装置内に構成されることによって、現実吟味や「失われた対象」の創造が可能となることを、Freud, Rank, Klein, Lacan の理論を通して論じている。また、同時に、精神療法においてこの「欠如」が構成され、「失われた対象」との出遭い (出遭い損ない) が反復されうる場が、転移と夢であることを考察する。

I. 夢分析の現在

Freud は、夢の分析は「無意識への王道」であると考えていた。彼は夢を顕在内容と潜在内容とに分けて捉え、一見したところ荒唐無稽な夢の内容も、実は潜在的思考の歪曲された表現であることを見出した。人間が眠っている間は心的過程の退行が生じ、自我活動が弱まるため、その隙を狙って覚醒状態では抑え込まれていた無意識的欲望が活性化される。そのとき、夢の「検閲官」が無意識的欲望の意識化を抑え込もうとするために、欲望成就と検閲との間の妥協として無意識的欲望が暗号化されて間接的に表されることになる。この暗号化には圧縮、置き換え、象徴化、劇画化などいくつかの法則があり、それら「夢の作業」を経て、夢の顕在内容が形作られている。従って、夢形成の過程を逆に辿ることができるならば、本来の無意識的欲望へと到達することができるという仮定が成り立つことになる。

また、Freud は夢を健康者の無害な精神病状態

として捉えていたため、夢を顕在内容から潜在的な夢思想へと遡る方法は、ヒステリーや強迫神経症などの精神症状の解説にも適用されることになった。精神分析がまずもってヒステリー症状、強迫観念、精神病などの精神疾患を研究・治療することを目的として創始されたことを考えるならば、Freud にとって夢の研究が精神分析を構築していく上で如何に重要な項目であったかが理解されよう。ヒステリーや強迫神経症の治療と夢の研究とは、Freud の無意識の探求が織り成す二本の紐のように互いに深く絡み合いながら、精神分析という一本の柱を打ち建てたと言えるのである。

『夢解釈』(1900)を出版した当初、Freud の夢分析の方法は、自由連想を用いて徹底的に夢の諸表象を辿り、無意識的欲望を明らかにするというものだった。Freud のこうした夢分析の方法は『症例ドーラ¹⁾』に詳細に示されている。『症例ドーラ』は 1905 年に発表されているが、ドーラを治療していたのは『夢解釈』が出版されたのと同じ年、1900 年の三ヶ月間であった。この症例

で、Freud はドーラの二つの夢（「火事の夢」「父の葬式の夢」）を徹底分析している。しかし、二つ目の夢を分析している過程でドーラが Freud の下を去ってしまい、治療は中断してしまった。Freud はドーラ症例を振り返る中で、あることに気づくことになる。それはドーラとの治療関係における「転移」を見落としていたことであった。Freud はドーラの夢分析は行ったが、ドーラとの治療関係の中に転移された幼児期の関係性を分析してはいなかったのであった。

この教訓を踏まえ、Freud は 1912 年に『精神分析における夢解釈の取り扱い²⁾』の中で、夢解釈に技法上の注意を促した。それは一つの夢を完全に解釈することに捉われず、精神分析治療全体の中に夢解釈を位置づける、というものであった。つまり、夢解釈はそれだけで特別な位置を占めるようなものではなく、あくまで精神分析療法で行われる自由連想の一部として扱われるようになったのである。このことは精神分析療法の中で夢解釈の位置づけに微妙な変化をもたらすことになった。精神分析研究の中で、夢の研究が行われなくなっていったのである³⁾。

精神分析における夢の古典的な研究としては、夢の象徴解釈や夢を文学・神話と比較したもの（Rank, O.⁴⁾, Abraham, K.⁵⁾）や夢の解釈技法を論じたもの（Stekel, W.⁶⁾, Sharpe, E.⁷⁾）が挙げられる。また、Freud 以後の夢研究では、Klein-Bion の理論を発展させたもの（Segal, H.⁸⁾, Meltzer, D.⁹⁾）やそこに Winnicott, D. W. を取り込んだもの（Ogden, T. H.¹⁰⁾）が主要である¹¹⁾。しかし、これらの夢研究に応える形で、夢の臨床研究が活発に行われてきたわけではなかったように思われる。

翻って日本に目を向けてみると、日本においては 1984 年に精神分析学会で初めて夢の特集が組まれている。そこで前田は欧州でも日本でも夢研究が少なくなった要因を二つ挙げている¹²⁾。一つは、すでに Freud によって夢が転移の中に包摂されたために、改めて夢を取り出して論じることがなくなったということ、もう一つは、古典的な神経症の減少に伴い標準的な精神分析療法を適応する症例が減ったということである。

日本における夢研究を振り返ってみると、たと

えば自我心理学派を中心としたアメリカ精神分析の立場からは鑑¹³⁾が、Jung 派においては河合や川崎¹⁴⁾が、Lacan 派では新宮¹⁵⁾が、Rogers 派では東山¹⁶⁾が、大きな足跡を残してきている。それぞれの研究者が、夢を通して人間の精神活動や精神構造の解明を試みており、また夢の臨床利用への技法的な手引きもなされている。しかし、今日の臨床研究に目を向けてみれば、夢分析の臨床利用とその研究はそれ以上の拡がりを見せているとは言いがたい状況にある。本論では、精神分析における「欠如」の問題を、Freud, Rank, Klein, Lacan の理論の中に捉え直し、夢解釈の本質を喪失対象との関連の中に位置づけることを通じて、現代の心理臨床場面における夢の臨床利用の意義を再考したい。

II. 心的装置内部に繋ぎとめられた外部

『夢解釈』の中で、Freud は改めて「その都度その都度、夢において具現化している欲望はどこから来るのであろうか」（1900b, p. 343）と問うている。彼は、日中に満たされなかったことを夢の中で成就させることが夢の欲望なのではなく、夢の欲望は常に幼児期の欲望成就に寄与していると考えたのであった。しかし、一口に幼児期の欲望と言っても、それがどのような欲望を指すのかを答えることはそれほど容易ではない。何故なら、幼児期に抱かれる欲望は無数に存在するからである。そこで、Freud は幼児期の欲望の起源をメタサイコロジカルに構成している。まず、彼は、幼児の最初の満足体験を想定する。それは腹を空かせた幼児が、空腹を解消するときに生じる満足体験の経験である。空腹に駆られた幼児が最初に満足を与えられるのは通常母親によってである。その時、この最初の知覚像（例えば乳房）は、欲求興奮に満足をもたらした像として記憶される。そしてこの欲求が再び現れたとき、その心的興奮は、先の記憶像を再現させようとすることになる。記憶像のこの再現は、最初の満足体験で刻まれた知覚の記憶像との知覚同一性を目指したものであり、Freud は、このような知覚の再現こそが、欲望の本質であると考えていた。しかし、夢の中で

再現された記憶像は、最初の満足体験の知覚像と同一のものではあり得ない。なぜなら、その記憶像の再現は、最初の満足体験と同じ満足を与えないからである。つまり、夢は幼児期の欲望成就の試みであると同時に、その失敗の再体験であるとも言えるのである。

この考察は心的作業における「現実吟味」の問題を提起せずにはおかないだろう。なぜなら、Freudにとって、夢の精神活動は、精神活動の第一次的な標本なのであり、夢の欲望の起源を辿ることは、結局のところ精神活動の起源を問い直す作業へと変換され得るからである。Freudにとって現実吟味の問題は『夢解釈』以前からのテーマであり、その端緒は精神分析創設以前に書かれた『心理学草稿』（1895）の中に見出すことができる。問題となるのは、吟味されるのがどのような「現実」なのかである。

『草稿』において、Freudは、心理的諸過程の「呈示可能な物質的諸部分の量的に規定された状態」を描き出すために、独自のニューロンシステムを導入している。そのシステムにおいてニューロンは自ら量（ $Q\eta$ ）を失おうとする傾向を持つ。Freudはニューロンシステムを知覚-感覚系のものと記憶系のものに分類し、前者を ϕ ニューロン、後者を ψ ニューロンと名付けている。 ϕ ニューロンは外界からの刺激をニューロン全体に伝える役割を持ち、量（ $Q\eta$ ）の通過後には元の状態に復帰する透過性のものである。一方、 ψ ニューロンは量（ $Q\eta$ ）の通過後に変形する非透過性の性質を持っている。量（ $Q\eta$ ）の通過後に ϕ ニューロンが変形する仕組みは、一つの ϕ ニューロンと他の ψ ニューロンとの接触点の障壁にある。その障壁は量（ $Q\eta$ ）の通過に際して、それを妨げるような抵抗を示すのである。つまり、量（ $Q\eta$ ）のニューロン間の伝達は未分化な原形質を通して行われ、その後は伝導過程そのものによって原形質に分化が生じ、同時により遠くへの伝導のための、より高い伝導能力が作り出されるのである。Freudはこれを「記憶は ψ ニューロン間の通道における差異によって体现される」（1895, p. 10）と表現している。

ここで、このニューロンシステムが内因性の刺

激（飢餓、呼吸、性欲等）を受け取る場合を考えてみたい。先に触れた乳児の例で言えば、乳児が空腹に襲われた時、 ϕ ニューロン内において内因性の伝導路から刺激を受ける中核ニューロンが充たされる。すると、まず乳児は泣き叫ぶなどの運動によって内因性の量（ $Q\eta$ ）を軽減しようとする。しかし、それによって負荷が軽減されることはない。何故ならそのためには外的世界に変化をもたらすための「特異的行為」が必要だからである。乳児の場合、それは他者からの介入によって達成される。すなわち、母親の援助である。こうして母親の介入によって乳児の空腹が充足されると、その体験はその時の知覚像とともに ϕ ニューロン内に記憶されることになる。そのとき記憶された知覚像を仮にa-bという知覚複合体とした場合、幼児が再び欲望状態となった時、幼児は最初の満足を得るために再びa-bという記憶像へと備給を行うことになるだろう。しかしながら、幼児がそのとき目の前にするものは知覚に似た何か、すなわち幻覚である。特異的行為によって一定の諸条件が外界で実現された場合にのみ内因性の量（ $Q\eta$ ）が放散されるのであってみれば、幻覚という記憶像への備給によって量（ $Q\eta$ ）の放散が生じることはあり得ない。そこで幼児は外界の中に再び最初の対象を見出そうと試みる。すなわち外界から来る新たな知覚像といま同時に欲望へと補給されている記憶像との突き合わせを行うのである。このとき、仮に知覚像が記憶像とまったく同じa-b複合体であるならば、知覚像への備給を介して速やかに量（ $Q\eta$ ）の放散が行われることになる。しかしその知覚像がa-c複合体であるならば、幼児はそれが外界からの知覚か否かを判断することを迫られる。すなわち、類似性をどのように同一性にまで完成させるかが量（ $Q\eta$ ）放散の鍵となるのである¹⁷⁾。

Freudはこの二つの複合体の共通要素aについて次のように述べている。「このようにして同じ人間の複合体は二つの構成要素に分かれるのであって、その一つは恒常的な組織体によって印象を与え、事物（[Das] Ding）としてまとまっている¹⁸⁾」（1895, p. 44）。すなわちaという知覚要素は身近な人間の現にそこにある普遍的な構成要素

のことである。この要素 a は、知覚対象が現実存在することを示す要素であり、それが現実の指標となる限りにおいて、知覚対象を幻覚から隔てることが可能となるのである。

このようにニューロンシステム内で知覚像の实在性の判断を伴う思考過程は、常に知覚を通して知覚対象の中にある普遍部分 a を見つけ出そうとする作業である。Freud は後に『否定』の論文においてこのことを再確認している。「現実吟味の最初の、つまり直近の目的は、表象されたものに対応する対象を現実の知覚の中に発見することではなく、それを再発見すること、すなわちそれがまだ存在しているということを確認することなのである」(1925, p. 6)。ここで再発見される対象とは事物 (Das Ding) のことである。そしてこの事物 (Das Ding) の存在に関わる判断の元となるのが要素 a である。しかしながら、要素 a が表象として内部、すなわちニューロンシステム内に取り込まれたものである限り、それは事物 (Das Ding) ではない、仮にそれ自体が内部に取り込まれていると確信すれば、そこには幻覚が現れることになるだろう。しかし、それが内部に書き込まれていなければ、そもそも心的装置が作られることもなかったはずである。したがって要素 a は ψ ニューロンの核において外を繋ぎとめた内として機能し続けているのであり、その際、事物 (Das Ding) は「判断を免れた残余」として「欠如」の痕跡を心的装置内部に刻むのである。このように、Freud が夢の欲望の源泉を探り当てた場所もまさにこの「欠如」にあり、夢はこの「欠如」の場において「欲望」することになるのである。

Ⅲ. Rank¹⁹⁾の出生不安と Freud の去勢不安 ——二つの「外傷」が意味するもの

ところで、精神分析では、この「欠如」によって構成される心理的な場は、二つの名で呼ばれている。一つは去勢コンプレクス、もう一つは母子分離である。このどちらもが、ペニスや母-乳房という幼児にとっての自己愛対象の喪失を前提としたものである。Freud 以後の精神分析では、去勢コンプレクスを核にして作られた症状をエディ

パル、母子分離を核にしたものをプレ・エディパルと呼ぶ習慣があるが、そもそも「欠如」の心理的な場を構成するこの二つの軸は、精神活動や症状形成での重要度を巡って、二つの対立軸として論じられていた。それは出産外傷を巡る Freud と Rank の論争²⁰⁾である。

Freud は出産外傷を全面的に否定していたわけではなく、むしろ、多くの箇所で出生不安を最初の不安経験として認めていた。しかし、Freud は出生不安を去勢不安に先立つ不安として認めたわけではなかった。何故なら、Freud によれば、出生時、幼児はまだ対象を何も見つけておらず、そこには見失うべき対象がないからである。従って Freud にとって本質的な喪失不安はあくまで去勢不安であり、それに先立つように見える出生不安でもなければ分離不安でもなかったのであった。

Rank によれば、人間の最も根元的な不安は出生不安である。出産の際、胎児は子宮というそれまで過ごした十全な「環境」を失い、新たな世界へと誕生する。つまり、胎児は無力な状態で、「それまでの環境」＝「母親」を失う経験をすることになる。Rank は、出生不安には母親や母親へと回帰する傾向と関係した「心理的な留め綱 (psychical anchoring)」(1926) という性質があると考えていたが、それは母親という環境から切り離された不安を解消するために、幼児を母体内回帰へと導く心理的な臍の緒のようなものであった。Rank は神経症者が抱く不安は、出生不安の再現であると考え、この不安の再現の目的を、誕生時の分離の再生、つまり子宮回帰欲望の現れと考えていたのである。Rank によれば、神経症者は強い分離不安を抱えているために子宮回帰欲望が強くなり、結果として原不安状況を繰り返し再現することになる。従って、神経症の治療は、この原不安を解消させればよいことになるため、Rank は分析状況を胎児が子宮内にいる状態と見なし、分析を終了することが出産外傷の遅まきながらの支配をもたらすと考えたのであった。そのために、Rank は期間を限定した精神分析療法を推進したのである。

Rank は後に出産外傷という「欠如」の心理的な場の構成を、意志と罪との関係の中で捉えるよ

うになる。彼は神経症者の中に意志することへの不安を見出し、その不安の源泉が罪悪感にあると考えるようになったのである²¹⁾。言うまでもなく、このように罪悪感が取り出されるのは、Rank が意志の概念を Nietzsche から引き継いでいることに由来している。Nietzsche は罪を否定する形で意志を規定したが、Rank は「意志と罪は一つの同じ現象の二つの相補的な側面である」(1936b, p. 31) と考えていたのであった。

そもそも意志の概念は精神分析と近接的な関係にある。Freud は Schopenhauer の意志を精神分析の心的衝迫 (Drang)²²⁾ と同じものと考えていたが、Rank は意志と罪の関係を次のように捉えていた。「いかにして個人は自らを自らによって決定できるのか？ 何故個人がそれを行うのはかくも困難なのか？ ここで私達は意志―罪問題に行き当たる。その問題についての知は、議論の余地なく Schopenhauer の心理学的な貢献であり続けている。しかし、彼は意志を拒絶した。一方、Nietzsche は罪悪感を否定しようとした。Freud は、最終的に、罪の問題を、神経症者が彼にそれを示したように理解した。それは正しいのであるが、しかし、彼はその問題を意志の限定された内容へと還元しなおすことで解こうとしたのである。つまり、性の問題である」(1936b, p. 61)。Rank は意志が性衝動の末裔であることを認めながらも、性によって生産されるものを、種ではなく、あくまで個の中に位置づけようとする。そして意志と罪とが切り離しえないのは、意志することが宗教や生物学によって人間に定められた限界を超えていくことになるからだと考えていた。すなわち、Rank にとって、各々に分離された現代人は、「自らが一人の神」であり、人間は意志によって自らを創造しなければならない存在として位置づけられているのである。

Freud とは異なり、Rank の自我にはそもそも「意志」という力が与えられていた。Freud にとって自我はエスと超自我の間で揺れ動く代理者であり、言ってみれば二つの審級の仲介者に過ぎなかった。従って、Freud の自我の自律性はエスと超自我の間で相対的にしか与えられていない。これに対して Rank の自我は「意志」の名の下に

自律性を与えられている。ただし、これは自我心理学の言うような意味での自律性ではない。

Hartmann が提唱した「非葛藤領域²³⁾」に位置付けられる自我の一次的自律性は、生物学的な大地にその根を下ろしている。彼の言う自我は機能的自我であり、いかに自我機能が分化しようとも、自らを「自己」として内省的に捉える機能を持つことはない、いわば盲目的な自我であった。これに対して Rank の言う自我の自律性には、神という絶対者を失った「自己意識」の中で、自らを見失う危険性を前に身震いする資格が与えられていた。このような自我の自律性に対する考え方の違いは、両者の「適応論」の中にもはっきりと表されている。Hartmann にとって自我は生物学的・生得的自我装置という土台を持ち、自我機能は成長と共に分化・発展していく。彼の自我理論の中では自我の適応能力自体が生得的な素因を有するものと仮定されているため、彼の言う葛藤外自我領域は生物学的な環境適合性を生得的に与えられており、ア・プリオリに現実同調的である。Hartmann にとって、現実性というものは既にいつもそこにあり、精神分析の過程の中ではその現実がそこにあることを気づかせるだけで十分なものである。

これに対して Rank の適応論は、現実への適合ではなく、むしろ現実の創造である。Rank は人間の適応論の前提に、自然な外的世界など假定していない。確かに外的現実があることは明らかであるが、それは Hartmann の言う生物学的な生得的能力によって適合できるような環境ではない。従って、Rank にとっては生物学的な環境適応力を人間の適応の前提とすること自体が無意味である。彼によれば外部との関係を創造的なものとするために作動する代表者が自我であり、そして自我が用いる力が意志なのである。しかし、神経症者は、自らが意志することに恐怖をもって反応する。彼らは自らの主観的な真理を見つけて、こう呟くのである。「私はこれほどに卑小で、最悪で、弱くて、無価値なので、私は私自身を欺くことも、1人の価値ある個人として私自身を受け入れることもできない」(1936b, p. 43)。Rank によれば、このように人間が個人としての意志を肯定するこ

とから逃れようとする理由は、Nietzsche が言うように罪という債務を負うことで自らの生の根柢を否定的な形で肯定するためではなく、むしろ意志することから必然的に生じる罪を負うことをただ避けんがためであった。

だが、ここで一つの疑問が生じはしないだろうか？ 仮に Rank の言うように人間が自らの意志によって、環境も自己も——あたかも超人²⁴⁾のごとく——創造するのだとしたら、Rank の意志には何故罪が伴うのであろうか？ Freud は罪悪感の起源を、エディプス葛藤、ひいては父の殺害に由来するものと考えていた。『トーテムとタブー²⁵⁾』（1913）で Freud が説明しようとしたものは、宗教に先立つ原父との原初的同一化の試みとそれに伴う罪悪感、そしてタブー＝法への事後的服従による欲動断念であった。Rank の罪悪感もその背後に神の殺害を想定したものであったが、全体＝母から切り離された存在として人間を位置づけ、そこに宿命的に自らの意志によって自らを創造する自我を措定した。それは Rank にとっては全体から切り離された自己が、意志の力で新たに自己を築き上げる過程として考えられていた。しかし、意志することに伴って、同時に罪が発生するということは、やはり Rank の自己はすでに法の中に入り込んでいたことを意味していたに違いない。ここに、おそらく Rank の意志－罪関係における本質的な矛盾が潜んでいるのである。

新生児は環境＝母から切り離され、個体として誕生することになるが、それは胎児が誕生を意志した結果ではない。Rank は誕生前の胎児の意志について語ったことはなく、彼の言う意志はあくまで誕生の後に問題となるものである。それは自らが自らを創造するという Rank の考えからも明らかであろう。この場合、意志する個人は「生まれる側」ではなく、むしろ「産む側」に位置付けられていることになる。つまり、Rank の言う個人は「全体」の中であって、自らを「個人」として産み出す者なのである。そして自らの意志によって生じた罪を自ら引き受けることを人間の宿命として定めたことは、まさに Rank がエディプスの地平に足を置いていたことを意味しているのである。それゆえ、Rank の出産外傷とは、プ

レ・エディパルな水準にある母子分離を偽装した、去勢コンプレクスであったと言えるであろう²⁶⁾。

IV. 抑うつポジションと償い —— Klein と Rank の合流点

精神療法の中で最初に母子関係を強調した精神分析家として、Rank と共に Klein の名を挙げることができる。Klein が提唱した抑うつポジションは、破壊された対象の「償い」の過程と考えられている。Klein の理論では罪悪感とは抑うつポジションの中で出現する。それは妄想－分裂ポジションにおいて幼児が悪い対象に向けた破壊衝動によって、良い対象をも破壊してしまったという認識に由来している。Klein によれば、この時期の抑うつ感情は、通常、決して病理的なものではない。それとは反対に、抑うつポジションにおいて前面に現れてくる悲哀の感覚は、むしろ自我の統合に役立つことになる。抑うつポジションと妄想－分裂ポジションとの決定的な違いは、前者において幼児が対象の不在を認識し始めることにある。というのは、妄想－分裂ポジションにおいて、幼児は対象（乳房）の不在を悪い対象の現前として空想的に内在化してしまうため、その対象が自我の外部に存在することを認めることができないからである。Freud 流に言えば、このとき幼児は外的知覚と内的諸像とを区別する術を持っていないのである。その結果、自我内で絶えず相克しあっている生の欲動の代理物である良い対象と死の欲動の代理物である悪い対象は、それが自身の欲動の代理物であるというまさにそのために、その相克から抜け出すことができなくなってしまうのである。

また、Klein は抑うつポジションについて次のようにも述べている。「抑うつの不安、罪悪感、償いの傾向は対象に対する愛情が破壊衝動よりも優るときにのみ、体験されるようである。換言すれば、愛が憎悪に打ち克つこと——究極的には生の本能（欲動²⁷⁾）が死の本能（欲動）に克つこと——を繰り返して体験することが、自我が自らを統合し、対象の対照的な側面を統合する能力のための本質的な必須条件であると仮定し得るだろ

う」(1948, p. 47). しかし, Klein のこの言葉を, 単なる生の欲動の讃歌として理解してはなるまい. そう理解してしまうことは, 抑うつポジションへの移行に関わる死の欲動の内在的影響力を見落とすことにもなるのである. というのも, これとは逆に, 抑うつポジションへの移行を支えるのは, まさに死の欲動の破壊性だと言うこともできるからである.

死を避け統合を求める性質からして, Klein の言う自我が生欲動に仕えるものであることは明白である. しかし, 生の欲動とこの自我だけでは現実を認識することは不可能である. 死の欲動を外へと投射し外部を悪い対象として内在化することは, 自我が外在対象を支配する試みであるが, それと同時に外部の「不在」を幻想的に否認することでもある. 妄想-分裂ポジションの自我は, 母を失うことよりも, 母を憎むべき対象として内在化することを選択する. このように生の欲動が幼児の内的世界を構成するために機能しているのであるとすれば, 死の欲動は, いわば自我の外界世界そのものと関わっていると言うことができる. つまり, 死の欲動は自我に絶滅の恐怖を与え, 対象の無化を引き起こすのだが, それはまさに死の欲動が知覚対象でも内的諸像でもない外部存在そのものへと向けられているからである. この死の欲動が向けられているものこそは, 内部に取り込むことのできない外的世界の外在性なのだと言えるだろう. こう考えなければ, 我々は Klein の次の言葉を理解することができなくなる. 「非常に長年続いている抵抗が克服された時初めて, 子供たちは自分の攻撃行動が現実の対象へと向けられていたのをまさに知るのである. しかしながら, このことが受け入れられると, まったく幼い子供でさえ, 一般に, 現実適応の著しい進展という結果になる」(1926, p. 162). ここで Klein は, 死の欲動が向けられているものこそ, まさしく「現実」の対象なのだと言っているのである. それは死の欲動こそが, 外的現実そのものへの道標となることを意味している. そしてこの欲動の働きによって外的対象そのものを知ることは, 母が外的存在であり自分の内部に取り込みようのないものであることを幼児が認識する端緒となるのであり,

或いはそこから対象喪失に伴う悲哀や罪悪感が生じてくるのである.

ところで, このとき幼児は自らの攻撃によって良い対象が破壊されてしまったことを知るのであるが, ここで幼児の中には全体対象が見出される. すなわち, それまではそれが「現実」の母だとは知らずに, 欲動が投影された無意識的幻想の中で母を良い対象と悪い対象の相克の中に捉え, カオスのような妄想-分裂の世界の中に投げ込まれていた幼児が, 実は全体対象の中に既に自らが位置づけられていたことを知るのである. 一般に, Klein の描く幼児の心性は, 妄想-分裂ポジションを経て抑うつポジションへと向かう経験的な認識に基づくもののよう理解されている. しかし, 実のところ, この順番は逆でなければならないと考えられる. 何故なら, それは, 良い対象と悪い対象という「部分」の規定は「全体」に先立つものとして想定することはできないという理由からだけではなく, そもそも最初の対象が破壊され, 喪失されたからこそ, その「欠如」を埋めるために, 悪い対象が作り出されたと考えるべきだからである. つまり, 悪い対象が作られるためには, どこかで最初の対象が破壊されたという何らかの判断が行われていなければならないのである.

このように考えると, Klein の抑うつポジションは, Rank が意志-罪関係の中に紡ぎ出した出産外傷と極めて近い心性を描き出していたことが理解されてくる. Klein の言う幼児の内的世界は取り込みと排出の循環によって母子一体の世界となっているのであるが, 死の欲動の働きによって, 幼児は母子一体の内的世界=全体世界の内側に外部という「欠如」を有することになる. この「欠如」は幼児に罪悪感を引き起こし, 「現実」に根ざした償いへと幼児を導く道標となる. こうした Klein の「償い」の中に, Rank の「創造」を見出すことはそれほど難しいことではない. Klein にとって「償い」の駆動力となるものは生の欲動であるが, Rank においてそれは「意志する個人」であった. Rank において個人は, 意志することによって自己を創造し続けるが, それは再び自らが「全体」の側に立ち, 自らが生み出されたのと同じように, 再び「全体」の側から自己を生み出

す過程であると考えられた。こうして個人が「全体」の側に立って自らの創造主となることは、そもその始まりに「全体」の中から個人を生み出させた意志に背くことにもなると想定される²⁸⁾。我々はそれを神の意志とも父の意志とも呼ぶことができるが、それゆえに、個人が意志することは、必然的に神を退かせ、父を殺したことになる。そこから事後的に罪を受け入れることになるのである。それは自らの意図とは関係なく、父を殺し、母と結婚したエディプスが、それでも父殺しを自らの宿命的な意志として引き受け、その罪を負う姿と重なるものであるだろう。いみじくも、Rank は意志することによって生じる罪と償いの関係を次のように述べている。「患者はこの分離過程において罪に直面する。その罪を彼は否定することはできないし、それを償わないこともできない。だが、彼が実際に生きる中で、ただそれに耐え、彼がなし得る最善の償いをすることはできる」(1936a, p. 85)。そして Rank のこの言葉は、Freud と袂を分かった後、Rank の中に隠されながらも保ち続けられていた精神分析という地下通路を通して、Klein の次の言葉の中へと反響しているように思われるのである。「私たちは、無意識的空想の中で、傷つけを償おうとする。——その傷つけこそ、私たちが空想の中で行い、私たちが無意識的になお罪を強く感じているものである。そしてそのために、この償いを行うことは、私の見るところ、愛におけるそしてまたすべての人間関係における基本的な要素である」(1937, p. 83)。

V. 原初的シニフィアンの「是認」と「排除」——「他者」における「欠如」の成立

抑うつポジションを成功裏に通過することは、幼児に悲哀をもたらすことになる。悲哀は外的現実を認識することによってもたらされるものであるが、Klein はそれを次のように表している。「喪の過程に特徴的な現実吟味は、外的世界との結びつきを更新する手段となり、それと同時に、崩壊した内的世界を再び確立させる方法になる」(1952, p. 101)。Freud は『喪とメランコリー』において、メランコリー患者は「自分が誰を失った

のかということは知っていても、その人物における何を失ったのかということは知らない」(1917, p. 276)と述べているが、メランコリーにおいては現実吟味がうまく行われていないことは明らかである。メランコリーでは、喪失対象は自我内部に取り込まれてしまうため、外部対象の喪失は否認されたままになるのである。したがって、メランコリーは、妄想一分裂ポジションに留まったままの状態にあると言える。さらに、Klein 派を代表する分析家 Segal は、抑うつポジションについて次のように述べている。「もしも、抑うつポジションに到達し、少なくとも部分的にせよそれを通過した場合には、その人がその後の発達過程で出会う障害は、精神病的なものにはならず、神経症的な性質のものになる」(1973, p. 103)。このように、抑うつポジションを通過することは、現実吟味がうまく行われるかどうかの分水嶺であるだけでなく、幼児の精神構造が精神病的なものになるか神経症的なものになるかの分岐点にもなるのである。すなわち、抑うつポジションを通過した後の精神構造の変化は不可逆的なものである。

Lacan は、精神病と神経症のこのような構造的な違いを、主体と原初的シニフィアンとの関係性の中に明確に規定している。精神病の精神構造の前提には原初的シニフィアンの「排除」があると想定されるのである。Lacan は Freud が用いる Verwerfung (破棄) に特別な意味を見出し、そこに forclusion (排除) というフランス語を当てたのであった。Lacan によれば、排除という概念は抑圧と対比される形で用いられており、Freud はそれについて端的にこう述べている。「抑圧 (Verdrängung) は破棄 (Verwerfung) とは別のものである」(1918, p. 112)。Freud は、狼男が四歳半の頃に見た去勢を連想させる幻覚(「小指が切断されて、かろうじて皮一枚でつながっている」)が、狼男の去勢に対する本質的な態度であると考えた。先に Freud の『草稿』で見たように、幻覚とは、記憶像への再備給であり、知覚像との照合から外在対象を再発見することとは別のことであったが、それにも関わらず、そこに現実を知覚していると認識することである。したがって、Freud は、狼男のこの幻覚体験は、彼が(女の子

にはペニスがないという) 去勢の現実に関する判断を「破棄」していた結果であると考えたのであった。「彼(狼男)が去勢を破棄したと私が述べたとき、この表現には次の意味が込められている。すなわち、彼は去勢について抑圧という意味において何も知らうとしなかったのである²⁹⁾」(1918, p. 89)。ドイツ語の「破棄(Verwerfung)」には、「(裁判で訴えを) 棄却する」という意味があり、狼男が去勢の事実を「破棄」したということは、彼にとって去勢が現実存在するのかわからないのかという判断そのものが退けられ、無効になったということである。ここでは現実吟味はうまく機能していない。これに対して抑圧(Verdrängung)は、現実吟味が可能な状態で行われる。Freudは「現実吟味を開始するには、かつて現実充足をもたらしてくれた対象が失われていることが前提」(1925, p. 6) だと述べているが、人間の心的装置の法廷において何ものかが実在するのかわかが吟味されるためには、まずは最初に「対象が失われている」ことを「是認(Bejahung)」していなければならないのである。そしてこの「是認」の後に、「抑圧」が生じるのである。「抑圧」は意識に上りそうになった無意識の表象を抑え込む心的機制であることから、抑圧されたものは、抑圧という意味においてはそれが何であるかわが知られていることになる。

Lacan は、抑圧の前提となるこの「是認」の場に、原初的シニフィアンを位置づけている。このシニフィアンは「対象が失われている」ことを表すシニフィアンであり、いわば「欠如」の表象と言える。だが、人間は主体をこのシニフィアンと重ねることによってのみ、言葉の世界に入り込み、意味の中で自己を規定し、現実を吟味することが可能となるのである。シニフィアンは「それだけでは何も意味しない」が、「シニフィアンは他のシニフィアンに対して主体を代理表象する」のである。

原初的シニフィアンの「排除」は、現実吟味や意味の水準で、すなわち精神病的な水準で病理を引き起こす。これに対して神経症では、原初的シニフィアンが「是認」された後に「抑圧」されたものが、検閲をかいぐりながら、別の形で表さ

れる。このように Lacan の病理論では原初的シニフィアンが排除されるか否かによって精神構造が規定されることになるが、これは先に Segal が抑うつポジションに付与していた性質と重なることになるだろう。

Rank が「全体」、Klein が「母子一体の内的世界」と想定した場所に、Lacan は言語的世界としての「他者」を置く³⁰⁾。Lacan によれば、人間は言葉の世界＝「他者」の中に入る際、生命としての主体を失う。言葉によっていかに自己規定を行おうとしても、そこに自己なる存在の決定的な確証を見出すことができないのは、人間が言葉を話す存在となる代償として、既に生命としての肉が支払われてしまっているからである。原初的シニフィアンは、生命としての主体と「他者」とが重なり合う場所にやってくる。そしてこの場所で原初的シニフィアンが「是認」される限りにおいて、主体はシニフィアンの連鎖の中で別のシニフィアンに代理表象されながら、言葉の世界を換喩的に横滑りしていくようになるのである。こうして主体は「他者」の中で言語的主体となるが、「他者」における原初的シニフィアンは、生命と重なるシニフィアンとして、意味の外側へ、すなわち「無意味」へと落とされることになる。

原初的シニフィアンの「排除」とは、この「無意味」のシニフィアンが「排除」されることを意味している。このシニフィアンは、「他者」の中で意味を成立させるために不可欠のものであり、このシニフィアンが排除されることによって、現実吟味や意味の世界での妄想一分裂的な病理が発生することになる。そしておそらく Klein の抑うつポジションを通過できるかどうか、心的装置内部にこの「無意味」の場が成立しているかが関係しているはずである。現実吟味の前提として「対象の喪失」が必要とされるのは、「他者」の中で生命としての主体の喪失が「是認」されているということが、抑うつポジションを成功裏に通過するための条件となるからに他ならない。この作業は「良い対象」と「悪い対象」が徐々に統合されるようにして行われるのでは決してなく、原初的シニフィアンの「是認」によって、言語的主体にとっての「他者」の場が一挙に獲得される

ようにして、「全体」対象が獲得されるに違いないのである。

では、Rank にとっての「全体」はどうであろうか？ Rank の自己は、「全体」の側に立ち、意志と罪との狭間において自らを切り出し、創造するのであった。Rank の自己は意志することも、罪を引き受けることも恐れない「超人」であるが、そこには如何なる「欠如」があったであろうか？ それは、既に意志する自己が「全体」から生まれ出てしまったという「欠如」である。意志－罪関係の中で語られる Rank の出産外傷は、まさに「全体」から生まれ出てしまった自己を「全体」の中から「外傷」として捉えているのである。意志することに伴う罪は、法の次元において、すなわち意味の次元において初めて成立するものであるが、意志そのものは——たとえ Rank がそれを否定しようとも——やはり殺害された神＝原父との同一化によって支えられていたように思われる。

それでは Rank において「全体」と「生み出された自己」とを繋ぐものは何であろうか？ それはおそらく「心理的な留め綱」である。Rank は「心理的な留め綱」を生れ出た自己と子宮を繋ぐ臍の緒のようなものと考えていたが、すでに生まれ出て、「全体」から失われた自己を、もう一度「全体」へと回帰させようとする試みが、神経症を生み出していたのであった。それは、すでに生まれてしまっているにも関わらず、未だ生まれていないかのような振りをして、意志することを避けることを意味していた。そして、Rank に従えば、自己がその喪失を受け入れたとき、自己は意志と罪とを引き受け、自己が失われた「欠如」の場に、失われた自己を再創造することができるようになるのである。

VI. 「欠如」の場に現れるもの ——言語的主体と「失われたもの」 との出遭い

言語的主体たる人間にとって、自らの起源は言語的世界の外に置かれており、もはやその直接的な経験に触れることはできない。だが、だからと

言って、その経験が跡形もなく消え去ってしまったわけではない。人間は、失われた存在の影に触れることは許されているのである。Freud はある夫人の夢解釈の折にこう述べている。「最も古い幼児期体験は、そのものとしては、もうありません。それは分析の中で、転移と夢とで代替されています」(1900a, p. 243)。ここで Freud が「もうない」と言っているのは、単に幼児期の実験経験のことだけではない。確かに、転移には、想起に抗う幼児期の対象関係のドラマが、現在の治療者との関係の中に情動を伴って反復されるという側面はある。しかし転移の本質的な部分はそのではない。むしろ、転移は想起不能なものだからこそ反復されるのである。

外傷性神経症者は外傷的な夢を繰り返し見るが、これは一見すると「夢は欲望成就である」という Freud のテーゼに反するものであった。そこで Freud は、苦痛なはずの外傷体験の夢が何故繰り返し見られるのかという疑問を解く鍵を、幼児の糸巻遊びの中に見出している。Freud は『快原理の彼岸³⁰』(1920)の中で、母親の不在の寂しさを、紐のついた糸巻で紛らわそうとする子どもの遊戯に着目している。その子どもが一歳半になる頃、母親が出かけて見えなくなると、何でも手に入る細々したものを部屋の隅や寝台の下などに遠く放り投げるといった困った癖を見せ始めた。ある日、Freud がその子どもを観察していると、子どもは紐を巻きつけた木製の糸巻をもってきて、紐の端を持ちながら覆いをかけた自分の小さな寝台の縁ごしに、その糸巻を巧みに投げ込んだ。そして糸巻が姿を消すと、子どもは意味ありげにオーオーオー (Fort) と言い、それから紐を引っ張って糸巻を再び寝台から出し、それが出てくると、今度は嬉しげな、ダー (Da) という言葉で迎えた。さらに別の日には、この子どもは母親が帰って来たのを見て「ボクちゃん、オーオーオーオー」と言って出迎えた。実は、この子どもは、一人で留守番をする間に、鏡の前で身をかがめることによって、自分の像を消滅させたり再現させたりする方法を発見していたのであった。Freud は、この消滅と再現の遊戯の中に、苦しい体験の反復の背後にある人間にとって根源的な反復強迫

への衝動と、それを支える死の欲動を見出したのであった。

Lacan は、幼児のこの糸巻遊びの中に、原初的シニフィアンと主体との重なりを見ている。「糸巻き投げという形で表現されているものは、この試練において、つまりシニフィアン性の命令が始まる出発点となる自己切断において彼自身から切り離されるものです」(1964, p. 82)。Fort/Da という一对の言葉がシニフィアンとして主体を代理表象しうるのは、まず「オーオーオー (Fort)」という声と共に、対象の不在が「是認」されているからである。この言葉と共に、生命としての主体はシニフィアンから切断され、対象 a となる。ここではまさに糸巻がそれである。Lacan によれば、この糸巻遊びが母親の不在を幼児が自己統率しようとする試みであるということは、断じてない。何故なら、この根源的なシニフィアンの導入を主体が統率することはありえないからである。仮に幼児が自己を統率しようようになるのだとしたら、それはシニフィアンの導入の結果であって、その逆ではない。そしてここから言語的主体は、言葉の換喩的な連鎖の中で、意味の中を横滑りしていくようになるのである。だが、言語的主体となった幼児が、再び糸巻き (対象 a) と出遭う場所がある。それが転移と夢である。

Lacan によれば、「知っている」と想定された主体」があるところには、必ず転移がある³²⁾。ここでは糸巻き遊びでの母親と幼児の関係を例にとって考えてみたい。糸巻き遊びでは母親の不在と幼児の不在が重なっていたが、幼児には母親が何故いなくなるのか、その理由がわからない。それは幼児にとって母親の欲望の謎である。言語的主体となった幼児は、原理的に自らによって自らを規定することはできないのであるから、母親の欲望の対象として自分を見出そうとするが、このとき、幼児の欲望は母親の欲望と重なりと同時に、幼児は母親の欲望の対象 a でもある。それ故、母親は幼児にとって「知っている」と想定された主体」となるのである。

精神分析では、この母親の位置を分析家が占めることになる。次の夢は、治療を開始して三か月後に自己臭症のクライアントが見たものであるが、

「知っている」と想定された主体」としての治療者とクライアントの転移関係をよく表した転移夢である。

〈修道女になる夢〉

修道女になる。歌おうとするとき、自分の声が周りと違うので驚いた (周りの人よりも自分の声が低い)。歌っているときの様子を絵にしたものを見る。そこには神父の姪らしき人も書かれている。その女の子は喋らない子で、神父から喋ることを条件に外出することを許されていた。

ラジオを聞きたくて録音しようとする。今までその番組は電波がとどいていなかったが、今日からとどくようになったので録音した。しかし、録音したものを聞かないまま終わった。

お母さんが私の日記を見たのか「死にたいとか言わないで」と私に言う。

この夢では神父と修道女の関係が治療者とクライアントの関係を表している。修道女にとって神父はまさに「知っている」と想定された主体」である。しゃべるかどうかが問題となっていることから、神父の姪もやはりクライアントであることがわかる。録音されたラジオは日記と対応関係にあるが、日記を見た母親の言葉は、自分は「死んでいない」と母親から言ってもらいたいクライアントの欲望の表れであり、クライアントが治療者に期待する言葉でもある。一般に、自己臭症の臭いは、「何かにおわない？」などの「他者」の語らいを通してクライアントのところへとやってくるが、それは言語的主体にとってすでに存在していないはずの主体が、まだ失われていないことをにおわす言葉である。この夢では「死んでいない (と言ってもらいたい)」主体が対象 a の場に現れようとしているが、この主体が「生きている」限り、クライアントの肛門からは「生身の自分」の臭いが——肛門分娩を暗示しつつ——漏れ出し続けることになる。だが、実はこの臭いは、「生身の臭い」というだけではない。何故なら、クライアントが言語的主体である限り、「生身の自分」

はすでに死んでいるからである。したがって、クライアントの自己臭は、生身の臭いであると同時に死臭でもあると言えるだろう。

転移においてクライアントは、治療者が対象 a との出会いへと導いてくれることを、恐れながらも、期待している。何故なら、言語的主体にとって対象 a は自己の存在の原因でもあり、また根拠ともなるからである。クライアントは治療者に一方的に自らのことを「語る」ことによって、徐々に、しかし必然的に「他者」の場にある治療者の欲望へと開かれていく。そして治療者の欲望とクライアントの欲望とが重なり合うとき、治療者は「知っていると想定された主体」となり、転移の中で、対象 a との出遭いが反復されるための場が作られることになる。新宮（1988）は、Fort/Da のような原初的なシニフィアン³³の対は、夢の中で「在—不在交代」という形をとって出現することを見出し、この道を解釈によって確保しつつ治療を進めることが重要であると述べている³³。そしてその歩みの過程で、原初的シニフィアンは「文字の夢心像」として、対象 a は「分断された身体」や乳房、糞便、声、眼差しとして、夢の中に現れうるのである。

転移は対象 a との出遭いの反復であり、夢はかつてあったはずの自分と出遭うという欲望を成就する場であるが、それと同時に、言語的主体にとって対象 a との出遭いが不可能である限り、それは出遭い損なう運命にあり、だからこそ夢はいつも欲望成就に失敗するのである。だが、それこそが、治療において夢を語る意味なのだと言えるだろう。

Ⅶ. ま と め

ここまで「欠如」の問題を軸に、精神分析の流れを辿りながら、夢と「失われた対象」との関係を考えてきた。Freud が、出生時にはまだ見失うべき対象がないと言っていたように、言語的世界に入る以前の対象は、言語的世界に入った後で事後的にあったと仮定されうるものである。この「事後的にあったと仮定される対象」が、「失われた対象」として欲望され、治療過程で転移と夢を

通して、出遭い損ないという形で再発見されるのである。『出産外傷』を発表した当初、Rank は出産外傷を出生時の外傷と考えていたが、新たにそれを意志—罪関係の中に捉え直すことによって、外傷的な自己喪失を「失われた対象」の再創造へと置き換えることができたのであった。また、Klein の抑うつポジションでは、幼児が全体対象の毀損に気付くためには、そもそも現実吟味の前提としてかつて満足をもたらした「対象」の喪失が受け入れられていなければならないと考えられた。そして Lacan は、Freud の射程の中で、改めてこの「失われた対象」を人間主体と「他者」との関係の中へと厳密に規定し直し、「失われた対象」を対象 a として概念化したのであった。精神分析的な精神療法では、転移と夢の中で対象 a との出遭いの道を確保しつつ、それと出遭い損ないを「反芻処理」しながら、それが「もうない」ものとしてクライアントに受け入れられていく過程を辿ることになる。その過程で、夢を用いた臨床はその効力を最大限に発揮するのであるが、夢臨床を考える際には——無論、夢の技法論も大切ではあるが——何よりもまず夢解釈の本質的な側面を捉え直しておくことが重要であると思われる。

先に前田が述べていたように、現代臨床では、かつてのような神経症らしい神経症者はあまり見かけなくなった。とりわけ近年、カウンセリング室の戸を叩く人たちは、適応に苦慮してはいるものの、「特に悩んでいることはない」「葛藤していることはない」などと言うことも多いのである。だが、だからと言って彼らの多くが神経症者になれないわけではない。彼らの言葉の中に Freud の言う「否定」を見出すことはそれほど難しいことではないのである。確かに、以前に比べると、心理臨床を行うためには、葛藤を「否定」しているクライアントたちを、まずは神経症者として苦悩するところまで導かなければならないというひと手間は必要とされているかもしれない。しかし、それでも彼らはかつての神経症者と同様に夢を見るのである。そして、夢を語ることによって、彼らもまた、「他者」の場において「欠如」へと開かれていることに気付き、対象 a との出遭い損な

いを反復しながら、自らを意志し、欲望し、償い、創造し、生きる歩みを進めていくことができるのである。

注

- 1) 『あるヒステリー患者の分析の断片』(フロイト全集 6 岩波書店 2009 収録)
- 2) 『精神分析における夢解釈の取り扱い』(フロイト全集 11 岩波書店 2009 収録)
- 3) Freud は『続・精神分析入門講義 (1933)』(フロイト全集 21 岩波書店 2011 収録)の中で、精神分析において夢の研究が行われなくなったことを嘆いている。
- 4) 第 4 版 (1914) から第 7 版 (1922) まで『夢解釈』の中に、Rank が書いた「夢と文学」「夢と神話」が掲載されていた。現在この二つの論文は ‘Traum und Dichtung. Traum und Mithus. Zwei unbekante Texte aus Sigmund Freuds > Traumdeutung < ’-Wien: Turia+Kant, 1995) で読むことができる。
- 5) “Traum und Mythos” (1909) [White, W. A. (Tr). Dream and Myths. The Journal of Nervous and Mental Disease Publishing Company, 1913] や「夢の象徴としての蜘蛛」(1922) [『アブラハム論文集』(下坂幸三他訳、岩崎学術出版社 1993) 収録] など。
- 6) 夢解釈で直観を重視しつつも、一定の手順に従えば夢を解釈できることを示した。Stekel, W. “The Interpretation of Dreams” (1943), Liverlight, New York.
- 7) 夢を言語的な側面からとらえ、その解釈において特に身体的比喩を重視した。Sharpe, E. “Dream analysis” (1937), Hogarth, London.
- 8) Segal, H. 『夢・幻想・芸術』(1991), 新宮一成他訳、金剛出版 1994
- 9) Meltzer, D. 『夢生活』(1983), 新宮一成他訳、金剛出版 2004
- 10) Ogden, T. H. 『夢見の拓くところ』(2001), 大矢泰士訳、岩崎学術出版社 2008
- 11) 彼らの夢研究に共通する視点は、治療関係において患者の象徴機能を育む場所として夢が捉えられていることにあるように思われる。
- 12) 精神分析学研究 vol 28. No. 2 シンポジウム特集号「司会者のまとめ」より。
- 13) 『夢分析入門』(1976, 創元社) 『夢分析の実際』(1979, 創元社) 『夢分析と心理療法』(1998, 創元社) など。
- 14) 『夢の分析』(2005, 講談社) 『セラピストは夢をどうとらえるか』(2007, 誠信書房) など。
- 15) 『夢と構造』(1988, 弘文堂) 『夢分析』(2000, 岩波書店) など。
- 16) 『夢分析初歩』(1993, ミネルヴァ書房) など。
- 17) Freud は、ニューロンシステムに構成要素 a の実在性を示す働きをする知覚-意識系の ω ニューロンを想定していた。Freud は、記憶像

の備給による幻覚に対しては、 ω ニューロンからの「現実指標」が与えられないため、「自我」は放散を制止した状態にあると考えていた。この ω ニューロンが自我に「現実指標」を与える機能を担いようかどうかは、本論で後述する「是認」や「排除」の問題と関わっているように思われる。

- 18) 原文は次のようである。‘So sondert sich der Komplex des Nebenmenschen in zwei Bestandteile, von denen der eine durch konstantes Gefüge imponiert, als Ding beisammenbleibt, ...’ 尚, Strachey, J. による Standard Edition では、‘Ding’ は ‘a thing’ と訳されている。
- 19) Rank は精神分析運動の初期からその中心メンバーとして活躍したが、1924 年の『出産外傷』出版を契機に Freud の下を離れ、フランス経由でアメリカに渡っている。精神分析の歴史の中では長らくその存在が忘れ去られていたが、アメリカのソーシャルワーク領域では「機能派」の理論的支柱となり、Rogers, C. の来談者中心療法に強い影響を与えたことでも知られている。Menaker, E. (1982) は、Rank が「精神分析運動の中の理論的・実践的發展における歴史的連続性の中のミッシング・リンク」(p. ix) だと述べているが、本論ではその連続性の一端を示すつもりである。尚、本論で展開される Rank 論は京都大学大学院人間・環境学研究科修士論文『精神療法と意志——オットー・ランクが問う、もう一つの力』(2007) に基づき、それを発展させた形で書かれたものである。
- 20) Freud は『出産外傷』が出版された二年後に、Rank の不安理論に反駁し、新たな不安理論を構築する意図を持って『制止、症状、不安』(1926) を発表した。Freud のこの論文を受けて、Rank は自説を擁護すべくアメリカのプリンストン大学において『不安の問題』(1926) と題された講演をすかさず行っている。
- 21) Rank は出生不安と罪悪感との関係を次のように述べている。「もし出生不安の問題をある程度理解したいと思うならば、私達は不安の心理的表象を手に入れなければなりません——その表象の一つについて私は『出産外傷』の中で言及しました。それは罪悪感です」(1926, p. 124)。このように Rank は罪悪感を出生不安の心理的表象として抽出するが、罪悪感のこのような捉え方は、Rank の言う意志と罪との関係を検討しない限り理解するのは難しいだろう。通常、精神分析において罪悪感は超自我形成に伴って生じるものと考えられるが、Rank は罪悪感をそのようなものとしては見ていなかった。何故なら、超自我形成に際して父を取り込み、父の禁止に従うことは、意志の否定に繋がるからである。「意志は発達のある段階で父に投影され、父の中で客体化される。何故なら父は強い意志を表しているからである。というのは、実際に彼は意志の象徴であり、また意志への抵抗の象徴だからである。だが、実際の問題は人間自身の中に

ある。それは同一化を越え、生物学を越えた問題である。罪悪感がやってくるのは、最初に人間に禁止をもたらす父の場に同一化するからではなく、むしろ発達において、人は父に、創造者にならねばならないからである」(1936b, p. 30)。Rank の意志は父との同一化とは別次元にあり、それは言ってみれば自らが自らの創造者になることにある。Rank にとって、人間は、生まれ出たからには自らを創造すべく意志せねばならず、それと同時に、意志に伴う罪(罪悪感)をも引き受けねばならない存在なのである。(Rank の罪の概念についてのこれ以上の議論は、拙論『精神療法と意志——オットー・ランクが問う、もう一つの力』(2007)の第四章を参照されたい)。

- 22) Freud は心的衝動を「欲動の運動的要素、力の総和、あるいは欲動があらわす活動要求の尺度」であり、また「欲動の持つ普遍的特性、すなわち欲動の本質」だと言っている。そして彼によれば「すべての欲動は、能動的なもの」である。これを「すべての欲動は、自らに対して肯定的なものである」と書き換えてみれば、Freud が Schopenhauer の意志と心的衝動(心迫)とを同一視した理由も頷けよう。
- 23) Hartmann, H. (1939)『自我の適応』誠信書房 1967
- 24) 精神分析ではこの超人に別の名が与えられている。それは幼児の万能感である。
- 25) 『トーマスとタブー』(フロイト全集 12 岩波書店 2009 収録)
- 26) ここでは意志する個人と全体との関係を図に表して考えてみたい。Rank が言う環境=母からの切り離しは、新生児が母から生まれ出ることではなく、生まれ出た個人が意志することによって、環境=母=全体から個人が切り出されることを意味している。個人の意志は全体との境界に裂け目を入れるが、それは全体から見れば罪であり、罪は全体と個人との境界の亀裂となる(図1)。これを全体と全体の中の個人の関係として捉えなおせば、意志と罪によって個人と全体との間に切れ目が入り、全体の中から個人の一部が切り出されることになるだろう(図2)。Rank の言う自己の創造とは、まさに意志と罪によって全体に穿たれた欠如の場に、意志することによって自己を再生産し続けることにある。

ところで、ここで問題となるのは、この全体の中の個人に対して誰が「父に、創造者になら

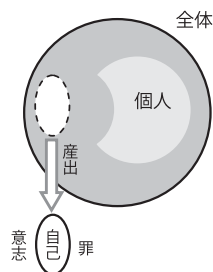


図2 全体からの自己の産出

ねばならない」と命じるかである。Rank はこれを先験的な倫理的命題と捉えていたのであった。しかし、意志と同時に罪が発生する限り、Rank の罪は、やはり Freud の言う原父殺害に伴う罪悪感と同じ水準に置かれるものであろうと筆者は考えている。

- 27) 一般に Klein の 'instinct' は「本能」と訳されるが、この概念は Freud の 'Trieb' を受け継いであるものである。そのため、動物学で用いる「本能」との混同を避けるためにも、本論では 'Trieb' の訳語に倣って「欲動」を用いることにする。
- 28) ここには原初的な父との同一化が見られるが、Rank はそのことを認めてはいなかった。
- 29) 文意の流れを重視し、この箇所は、日本語版の全集を参照しつつ、訳語に変更を加えた。Wenn ich gesagt habe, dass er sie (die Kastration) verwerfe, so ist die nächste Bedeutung dieses Ausdrucks, dass er von ihr nichts wissen wollte im Sinne der Verdrängung.
- 30) 本論でも触れているように、Rank の「全体」も、Klein の「母子一体の内的世界」や「全体対象」も、Lacan の「他者」と同様、その内部に「欠如」を有している。
- 31) 『快原理の彼岸』(フロイト全集 17 岩波書店 2006 収録)
- 32) 『精神分析の四基本概念』(1964, p. 313)
- 33) 新宮は「在不在交代の原則は、『私とは何か』という問いを、夢を見ている主体が絶えず発し続けている、ということである」(1990, p. 11)と述べている。

引用文献

- Freud, S. (1895). Entwurf einer Psychologie. 総田純次(訳). 心理学草稿. 新宮一成・鷺田清一ほか(編), フロイト全集 3. 岩波書店. 2010
- (1900a). Die Traumdeutung. 新宮一成(訳). 夢解釈 I. 新宮一成・鷺田清一ほか(編), フロイト全集 4. 岩波書店. 2007
- (1900b). Die Traumdeutung. 新宮一成(訳). 夢解釈 II. 新宮一成・鷺田清一ほか(編), フロイト全集 5. 岩波書店. 2011
- (1917). Trauer und Melancholie. 伊藤正博(訳). 喪とメランコリー. 新宮一成・鷺田清一

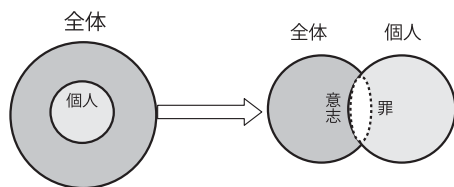


図1 全体からの自己の分離

- ほか (編), フロイト全集 14. 岩波書店. 2010
- (1918). *Aus der Geschichte einer infantilen Neurose*. 須藤訓任 (訳). ある幼児期神経症の病歴より. 新宮一成・鷺田清一ほか (編), フロイト全集 14. 岩波書店. 2010
- (1925). *Die Verneinung*. 石田雄一 (訳). 否定. 新宮一成・鷺田清一ほか (編), フロイト全集 19. 岩波書店. 2010
- Klein, M. (1926). *The Psychological Principles of Early Analysis*. 長尾博 (訳). 早期分析の心理学的原則. 西園昌久・牛島定信ほか (編), メラニー・クライン著作集 1. 誠信書房. 1983
- (1937). *Love, Guilt and Reparation*. 奥村幸夫 (訳). 愛, 罪そして償い. 西園昌久・牛島定信ほか (編), メラニー・クライン著作集 3. 誠信書房. 1983
- (1948). *On the Theory of Anxiety and Guilt*. 杉博 (訳). 不安と罪悪感の理論について. 西園昌久・牛島定信ほか (編), メラニー・クライン著作集 4. 誠信書房. 1985
- (1952). *Some Theoretical Conclusions regarding the Emotional Life of the Infant*. 佐藤五十男 (訳). 幼児の情緒生活についての二, 三の理論的結論. 西園昌久・牛島定信ほか (編), メラニー・クライン著作集 4. 誠信書房. 1985
- Lacan, J. (1964). *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. 小出浩之・新宮一成ほか (訳). 精神分析の四基本概念. 岩波書店. 2000
- Menaker, E. (1982). *Otto Rank — A rediscovered Legacy*. Columbia University Press.
- Rank, O. (1926). *The Anxiety Problem*. In Kramer, R. (Ed.), *A Psychology of Difference*. Princeton University Press. 1996
- (1936a). *Will Therapy*. Alfred A. Knopf. 1950
- (1936b). *Truth and Reality*. W. W. Norton & Company. 1978
- Segal, H. (1973). *Introduction to the Work of Melanie Klein*. 岩崎徹也 (訳). メラニー・クライン入門. 誠信書房. 1977
- 新宮一成 (1988). 『夢と構造』 弘文堂
- (1990). 『ラカンと臨床問題』 弘文堂

The dream and the lost object

—— “lack” from a psychoanalytic point of view ——

Akira MARUYAMA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Upon entering the linguistic field, human beings lose the subject that existed pre-linguistically — not one “that was once,” but one “that can be assumed ex-post that there would be” after entry. Freud proposed that dreams are an attempt to fulfill childhood desires and dream analysis is the “royal road to the unconscious.” However, the earliest childhood experience itself in fact “no longer exists,” and the fulfillment of childhood desires is ultimately destined to fail.

In this paper, a link, which Freud described in the “draft” (1895), between the thing (*Das Ding*) and an index for judgment of its existence, is regarded as “lack.” An examination of the theories of Freud, Rank, Klein, and Lacan reveals that a reality test and the creation of the lost object are possible through this “lack,” established in a mental apparatus. Moreover, it will be argued that transference and dreams in psychotherapy are the places where this “lack” is occurring and encounters with (or failures to encounter) “the lost object” may be repeated.